

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	三 盃 美 千 郎
2. 審査委員	主 査：(上越教育大学教授) 松本 健義 副主査：(上越教育大学教授) 高石 次郎 委 員：(兵庫教育大学教授) 初田 隆 委 員：(上越教育大学教授) 後藤 丹 委 員：(上越教育大学准教授) 松尾 大介
3. 論文題目	子どもの造形行為における意味生成過程の根拠としての生命的な〈場〉に関する実践的研究
4. 審査結果の要旨	<p>教科教育実践学専攻芸術系教育連合講座 三盃美千郎 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時：平成28年2月 7日（日）15時30分～16時00分 場所：上越教育大学 プレゼンテーション室（2講105）</p> <p>1. 学位論文の構成と概要 本論文は、全IV部により構成されている。</p> <p>第I部 問題設定と本研究の目的 第1章 本研究の動機 第2章 問題の所在 第3章 先行研究の検討と本研究の目的 第4章 本研究の方法と論文の構成</p> <p>第II部 造形行為における意味生成過程 第1章 相互的で協働的な意味生成過程 第2章 造形行為の進行中における言語活動の位相 第3章 鑑賞行為による〈かたり〉と意味の生成過程 第4章 造形行為を共に生きる他者との相互作用的關係</p> <p>第III部 造形行為における〈場〉に関する考察 第1章 造形行為の内実モデルを視点とした〈場〉の考察 第2章 生命的な〈場〉と造形行為</p> <p>第IV部 造形行為における意味生成過程の根拠としての生命的な〈場〉 第1章 造形行為の根拠としての生命的な〈場〉 第2章 造形行為における意味生成過程の根拠としての生命的な〈場〉の成り立ち</p> <p>第I部では、問題の設定と研究の目的、方法、論文構成について、自身の教育実践、子どもの〈学び〉の過程、先行研究に基づき考察し位置づけている。</p> <p>第II部では、造形行為における意味生成過程について3つの授業実践事例より、以下の5点について、明らかにしている。</p> <p>①〈私〉と〈他者〉の關係において〔〈もの-かたち〉+ふるまい〕によって、「共同化された対象」「共同化された行為」が生まれ「共同化された志向性」がつくりだされる過程において、意味はできごと世界を生成する認知的關係として社会的關係の中で生起する。</p>

②意味生成過程において、〈私〉と〈他者〉のあいだに間主体的で間主観的な〈場〉が成り立ち、この〈場〉が〈私〉と〈他者〉の相互の主観性を成り立たせる。

③造形行為の進行中の発話行為は造形行為と相互作用的な関係にあり、造形活動を拡張する契機となって、間主体的な〈意味世界〉を生成していること。これにより造形行為における言語活動のアクチュアルな位相を明らかにした。

④③を根拠として、“つくり表す行為”と“つくり表しているもの”を他者と相互に鑑賞する行為を通して〈かたり〉と“つくり表された意味”とが同時に生成される、造形活動における鑑賞行為の位相を、明らかにした。

⑤多様な表現行為を多元的に相互作用させて造形行為を行うことで、授業における〈できごとと世界〉を生成し成り立たせている造形行為を通じた子どもの〈学び〉の過程を明らかにした。

第Ⅲ部では、造形行為における〈場〉について、造形行為の内実モデルを仮定し、内実モデルとの関係性からトランスクリプトを再記述して考察し、〈場〉のもつ協働性、間主体性を明らかにした。また、事例Ⅳをもとに子どもの造形行為の生成と成り立ちを支える〈場〉を、生命的〈場〉ととらえて考察し、生命的な〈場〉は、複数の〈図〉と〈地〉の関係が重層的に起きるあいだに生起していることを明らかにした。

第Ⅳ部では、第Ⅱ部、第Ⅲ部の考察を受けて、造形行為における意味生成過程の根拠としての生命的な〈場〉の成り立ちについて、永井均及び西田幾多郎の「無の場所」論に依拠して「生命的な〈場〉モデル」を提出し、モデルを視点として事例Ⅰと事例Ⅳについて再記述による分析を行い考察している。子どもたちは他者と共に実践に参加し共に行うことで、共有の世界に生き合う自己や他者を包み込み、個々人がそこに生きる行為を生成することを可能とする〈場〉を創造していることを明らかにした。これを生命的な〈場〉と結論づけている。

本研究のまとめとして、生命的な〈場〉のもつ特性について整理し、研究成果をもとに学校教育現場の実践に向けた学習活動構想の視点を提出している。

2. 審査経過

本研究の審査は、次の観点について行った。

(1) 研究目的の妥当性と論文構成の整合性について

本研究は、小学校図画工作科授業での造形活動における造形行為と相互行為が、授業のできごととの共有世界を、共に生きる他者との社会的関係を通して、作品の意味世界を共感的に現象させ、造形行為、相互行為、意味世界、自他の社会的関係を相互に形成し成り立たせているその実践的関係とその根拠について、これを「生命的な〈場〉」として位置づけ明らかにすることを目的としている。そのため、子どもの造形活動の実践的関係に着目した研究開発実践を試み、この実践を通して収集した事例の現象学やエスノメソドロジーの視点にたつ記述と考察を行っている。この成果に基づき、子どもの造形行為における意味生成過程の根拠としての生命的な〈場〉のモデルを構成し、モデルに基づく事例の再記述を通して意味生成過程の根拠を明らかにしている。

(2) 研究の独創性と発展性について

以下の3点である。

①本論文の研究目的に基づき、(a)造形行為の生成、(b)鑑賞行為の生成、(c)個別的で協働的関係の生成、(d)個と材料との相互作用による造形行為の生成、の四つの学習活動を研究開発し、その各々から4事例を収集して記述分析と考察を試みている。その際、(a)(b)の研究開発と事例分析の成果に基づき、(c)(d)の研究開発と実践を試みて記述分析と考察を行っている。これにより、造形行為に媒介された学習過程のモデル化とその検証を行った教育実践の質的研究である。

②活動の内実が捉えにくい図画工作科「造形遊び」の活動過程を、現象学やエスノメソドロジーの手法を用いた造形行為の実践過程の詳細な記述考察を行うことにより、造形行為が社会的文化的行為として授業において生成される過程を明らかにした。

③造形行為や言語行為を用いた相互行為が、認知的関係と社会的関係を多元的に成立させる場をかたちづくり、これが造形行為を社会的文化的な行為として生成する生命的な〈場〉として生起して働くことが教育の根拠となることを明らかにした。

(3) 教育実践への貢献について

本論文で明らかにした図画工作科における表現行為や鑑賞行為の形成における意味生成的な〈場〉は、見方、感じ方、表し方といった子ども個々の身体的行為を資質や能力として形成する根拠と、学習活動を共にする周囲の他者（子どもや教師等）の見方、感じ方、表し方との社会的文化的関係の成立の根拠とを、身体的行為とその経験、及び、言語・記号・道具等に多重に媒介された意味生成過程から明らかにしたものである。そのため、図画工作科や美術科に限らず、身体的表現行為と言語・記号・道具等に多重に媒介された学習過程の実践的研究の根拠と可能性を示す研究である。学校教育において、今後期待される学習活動と学習環境の構成に基づく教育実践学研究において、多くの示唆を提起している。

3. 審査結果

以上により本審査委員会は、三益美千郎 の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。